

コンピュータ利用と大学教育

梶原 博

I はじめに一情報化社会の到来

「情報化社会」を人間の未来にとって良きものとするためには、「多様な情報を駆使した批判的精神の育成」という視点から「情報化」をとらえるべきだろう。つまり、ここでいう情報とは、商業・企業ベースから発せられる「情報」だけではなく、草の根的な、生活（学生、教官を問わず）の中から自分たちで生み出し自分たちの責任でもって発信する「情報」をも含むのである。「情報化」教育における大学の役割は、これら「情報」を主体的・批判的に摂取し、積極的にコミュニケーションの環を拡げられる人間、未知なる「外」に対する積極性を持ち、同時に「外」に伝えるだけの価値ある「情報」を自ら創造できる人間を育てることにある。

パソコンを中心とする新たなメディアは、コミュニケーションの形態に革命的な影響を及ぼす。大衆の一員としての個人に発する情報は極めて大量かつ多様であるために、社会的なフィード・バックを試みようとしても、常に何らかの集約を要することが当然だとされてきた。ところが、パソコン・ネットワークに端的に現れているようなコミュニケーションの形態においては、第三者による情報集約＝「処理」は原則的に不要となる。ある問題について、地域の住人すべてと議論し、互いに考えを知りあう、古代ギリシャの直接民主制のようなシステムが可能になったのである。

激変する現在の世界情勢において、メディアの果たす役割がいかに大きなものであるかは枚挙にいとまがないが、本来的に双方向であるパ

ソコン・コミュニケーションが一般化した場合、社会に与えるインパクトがどのようなものとなるのか想像もつかない。なぜならば、個人が個人の資格で自由に発言し、そうして発言された内容が無媒介にすべての人に届けられ、自己の責任でもって届けられた意見を判断する、そのようなコミュニケーション・システムを我々はいまだ経験したことがないのである。

こうした時代の変化が大学教育にどのような影響を与えるか、大まかなヴィジョンを得ることが本論の目的である。

- * コンピュータ・ネットワークの具体的な形については、ここでは取り上げないが、メッセージの分類・検索機能がついた、文字・画像・数字の転送できるワープロ付留守番電話のようなものを想像していただきたい。またこのようなハードウェアを、用語の厳密さは失われるが、便宜上 LAN (Local Area Network) と呼ぶことにする。

II 大学とネットワーク社会

1. 「地域」との再結合

大学は学生を通じてのみ社会と接しているのではない。生涯教育が叫ばれるのも社会の知識欲の在り方が変化してきたからである。生活のゆとりを背景とした趣味や教養という形での知識を取得することを目的とする以上に、市井の暮しにおいてさえ高度の知識を身に付け、活用せざるをえない社会＝「情報化」社会がいよいよ現実のものとなってきたからに他ならない。

「情報化」社会において要求される知識は極めて

て動的な性格をもつ。絶えざる日常での消費に晒されることを通じてその真価を問われるものであり、このような知識の構造変化は、蓄積型の知識を授ける＝授業の場に偏重した大学の存在意義を根底から揺り動かすものである。

絶えざる消費に晒される知識とは、何よりも地域に根差した「生活」の知識であり、絶えざる消費に耐えるためには、耐えざる供給を同じく「生活」に求める他はない。知識構造の時代的变化を認めるならば、生活の場である地域との有機的な再結合をはからざるをえない。大学自ら積極的に地域の情報を集め、大学ならではの視点を活かして地域に役立つ情報に加工し、地域に提供することができるならば、大学は自然とその地域にとってなくてはならないものになる。「地域の大学」として地域ネットワークの結節点となってゆくことにこそ、大学の未来があるのではないだろうか。

そこで次に、地域社会の主役の一つである企業とのネットワーク作りを考えてみたい。もっとも今時点で、我々が送り出すことのできる情報は卒業生という生身のものしかないわけで、企業社会のネットワーク化が、大学でのネットワーク教育(具体的には学内LAN教育)とどう結びつくのかを論じることにしたい。

2 ネットワーク社会における企業人教育

企業のコンピュータ化を睨んで設置されている本学のパソコンの授業は、あくまで一人1台の、文字どおりパーソナルなコンピュータ化に対応したものである。しかしながら、最近の企業のコンピュータ利用の実態は大きく変わりつつある。単なる清書・計算マシンとして現在孤立的に用いられているパソコンが、企業内の全データの入出力及び加工のための端末として相互に結び付けられるようになったのである。

複数のパソコン間で協働的にデータを処理するわけであるから、データの規格化とその保全とが重要となる。学内LANを利用した学習は、こうした企業社会の新しい潮流について、肌で感じることになるだろう。

だが、LANに対する習熟は、こうした技術

論レベルで得られるものをはるかに越える未来を学生に与え得る。

ネットワーク社会における「能力」を考える場合、知識や経験もさることながら、感覚的な「やりたいこと」=ヴィジョンの有無が重要になる。ところで現時点では、ネットワーク化による日常業務の変化についてのヴィジョンは、経営者に十分行き渡っていない。これは卒業生にとって大きなチャンスである。将来彼らが感じるかもしれない様々な「やりたいこと」に備えて、「できること」を、単なる一つの技術として豊富に学生に提示することは、彼らの新しい可能性につながる。思い出せないこと、わからないことがあれば、大学に相談に来ればよい。自分が直接できなくてもよいのだから、気楽である。卒業生のネットワークができるならば、こうした相談への対応能力も高まり、そのことがまたネットワークを強化する。将来必ず必要になる、特定の間人間関係に頼らない、企業との直接的な情報交換に向けて、卒業生のネットワークはその先駆けとなるだろう。

地域社会のネットワークといい、LANといい、難しく考える必要はない。要は誰が何をしたがっているのか、誰が何を知っているのかという情報を管理できればよいのである。ネットワーク社会に対応できる最低限の技術をもった人間を育てること、これこそが直接に大学と企業(あるいは社会)との連携を強め、大学の情報センター化に寄与するのである。

III LANと教育方法一般の転換—レポートシステム

コンピュータ・ネットワークであるLANの導入は、導入することそれ自体、新しい教育システムを我々が手に入れることを意味する。LANとは、そもそも情報を大量に・木目細かく・リアルタイムに処理することを目的とするものであり、マスプロ的な従来の授業システムとは対極のところの位置しているからである。

最近の学生の「学力」低下について、至る所で、様々な議論が行なわれている。だが、実のところ「学力」向上のための解決策は誰もが知

っている。一人一人の学力や理解の進展に応じてまめにレポートを課し、必ずコメントを付けて返し、レポートを再提出させればよいのである。そしてこの方法が、現状では夢物語であることも皆知っている。

LANは夢を現実のものに近づけてくれる。その利点を具体的に考えてみよう。

- ・ 集めなくてもよい。学校のワープロに打込む、即提出である。締切を厳格にしたければ、タイムロックをかけておいてもよい。
- ・ したがって手づから返さなくてもよい。コメントを加えて保存したら、後は学生がその文書と呼出すだけである。
- ・ 評価が柔軟になる。学生のレポートを読んでいると、いろいろな理由で別の学生のレポートと対比したくなるのが度々ある。同種の意見をまとめたり、対照的な意見を引き出したり。場合によっては、明らかに学生同志で写しあったレポートを抽出したり。こういう場合には、記憶に引かかる2、3のキーワードで検索を行えば、たちどころに目的のレポートを呼出せる。
- ・ 抽出されたレポートを読みながら「ここからここまで」と指さしてその場で抜書きができる。抜書き用に画面の下半分くらいを空けておいて、抜書きをそこに引っ張っていくのである。

複数の関連文書から抜書きするわけであり、また、そうでなくともどこにでも自由に抜書き部分を挿入できるわけだから、カード形式などによる抜書きと違って、最初から思考の流れにそって整理されてくる。個別的な学生とのコミュニケーションが、直ちに全体の授業に反映できるのである。

紙を使わない=電子化されたレポートの利点は、ざっと考えてもこれ位ある。さらに、もしこうしたレポートシステムが一般化するならばどういふ事態の変化が生ずるであろうか。

レポートシステムが一般化すれば、自分以外の教官が何を学生に教えているかリアルタイム

で、かつ偏見なしに知ることができるわけだから、どうしても教官同志での連携を意識せざるをえない。足りるところ、足らざるところを互いに補い合う姿勢が生まれる。相互の協力において一致できる部分が明確になればなるほど、すなわち教育の目的がはっきりすればするほど、全体として協力しながら教育の質の向上をはかることが可能になるわけである。また、そういう態勢が大学になれば、良い学生を「集める」のではなく「育てる」ことが私学か否かを問わず死活問題となりつつある現状を乗切れるはずがない。「育てる」ための核となるヴィジョンを日常の中から醸成させていくこと、ここにこそ教育におけるLAN環境の意義があるといってもよいのである。最後に、本学の状況を踏まえながらこの問題を掘り下げてみたい。

IV おわりに一大学運営とLAN

我々に要求されている課題は、どのようなものなのだろうか。

事務に関しては、さしあたり次のことが問題となるだろう。生涯教育などに代表される就学形態の多様化は、これまでの様な比較的単純な学生把握を不可能にする。パートタイムの学生の比重が高まり、カリキュラム、時間割などすべての事務業務が複雑化する。日・祝日受付の様な量的サービスの拡大とともに、学生の転科・転学、新たな授業形態への教官の模索といった、パターン化されない業務が日常的に生じる。事務職が事務(あるいは就職)のことだけでなく、教育に関しても学生の良きアドバイザーであることが必要になってくるのである。LANは、教育現場の情報をリアルタイムで事務へ送り込むと同時に、履修登録の様な機械的作業を教官・学生サイドに肩代わりさせることなどによって、新たなサービスを提供するための余裕を事務職に与える。大学の魅力が多様なサービス能力で計られていることを考えると、こうした対応は急務である。

研究スタッフにおいても、当然変化が生じる。今やどんな学問研究・企業活動も「生活者」と

の関わりを抜きには存在しえない。本学の「生活文化科」もそうした主旨のもとで独立することになった。そして「衣食住」を現在無縁のものとするようなスタッフも、今後こうした問題意識をもちながら研究していくことが、自分の研究を実り有るものにしていくのに不可欠であることが自覚されてくるだろう。同時に「生活文化」そのものの研究者において、様々な専門外の知識が必要になってくることはいうまでもない。したがって、両研究スタッフの活発な交流がどうしても不可欠になってくる。昨年度から始まった短大研究会や、移転に前後する様々な公的・私的議論はまさにこの線上にある。大学のビジョン作りと密接に関わる、こうした研究環境の変化にとって、本学の構成と、小規模校ならではの学科間の心理的距離の近さは、本学の持つ大きなメリットである。

ただ現在のところ、こうした努力が実を結んでいるとは言い難い。私的な議論は形に残らず、吟味されることのないまま多忙な日々の中で忘

れさられ、他方、貴重な時間を割いて行なわれる公的会議は同じ議論の繰り返しに陥ることがしばしばである。先にあげた事務業務での課題も含め、事態の改善への最大の武器の一つがLANなのである。

LANを利用するということは、場所や時間、地位や専門という様々な制約の中で行われる現在のコミュニケーション形態への挑戦である。LANという武器を使用することには大きな危険が伴うだろうが、この武器を縦横に駆使して、教育のビジョンを明確にすると同時に、スタッフと学生の質の向上と学内の活性化をはかるならば、来るべき就学人口の減少など全く問題にならないであろう。

コンピュータ技術の発達が生み出した、一つの技術的システムにすぎないLANの構築が、大学教育の新たな展望と密接に結びついていることが僅かなりとも伝えることができたならば幸いである。